

五章 鷲見氏と東氏の関係は？

― やまと阿千葉城の鷲見氏 ―

「濃北一覽」に阿千葉城にいた鷲見貞保を東常慶が滅ぼしたという記事があります。南北朝の時代には共に土岐氏に属して南朝方と戦った鷲見氏と東氏ですが、争いが起こったのです。そのことは「濃北一覽」「郡上古日記」に書いてあります。

(以下「鷲見家史蹟」より)

『応仁・文明以後、鷲見郷には、鷲見彦六行保が居たのだが、自ら出陣して中央の戦いに加わることは無かったが、その子等は歴戦の強者ぞろいであった。行保に四人の男の子があり伊豫守保照、美作守保重、大学助保兼及び新左衛門保房と言う。

伊豫守保照は庶子だったせいかわ家を継がず、又、鷲見城も一城だけでは戦国への備えが不十分だったためか、鷲見郷に入るべき関門である剣村に一城を築いて、ここに居た。永正一一年(一五一四)伊豫守保照が亡くなり、その子の市兵衛貞保の時になって、栗栖城にいた東常慶と争いをして、天文十年(一五四一)六月十八日貞保が遂に剣城で自害した。思うに東氏は、同年越前の朝倉氏と戦い、之を撃退しその余勢をかって鷲見郷の一角を取ったものであろう。「濃北一覽」にその戦いの記録がある。

天文十年栗栖篠脇の城主東常慶、剣目城の鷲見市兵衛貞保を攻め滅ぼそうと軍勢を準備したことが鷲見家にも聞こえたので、手近な者達を集め、相談して戦の兵を用意した。

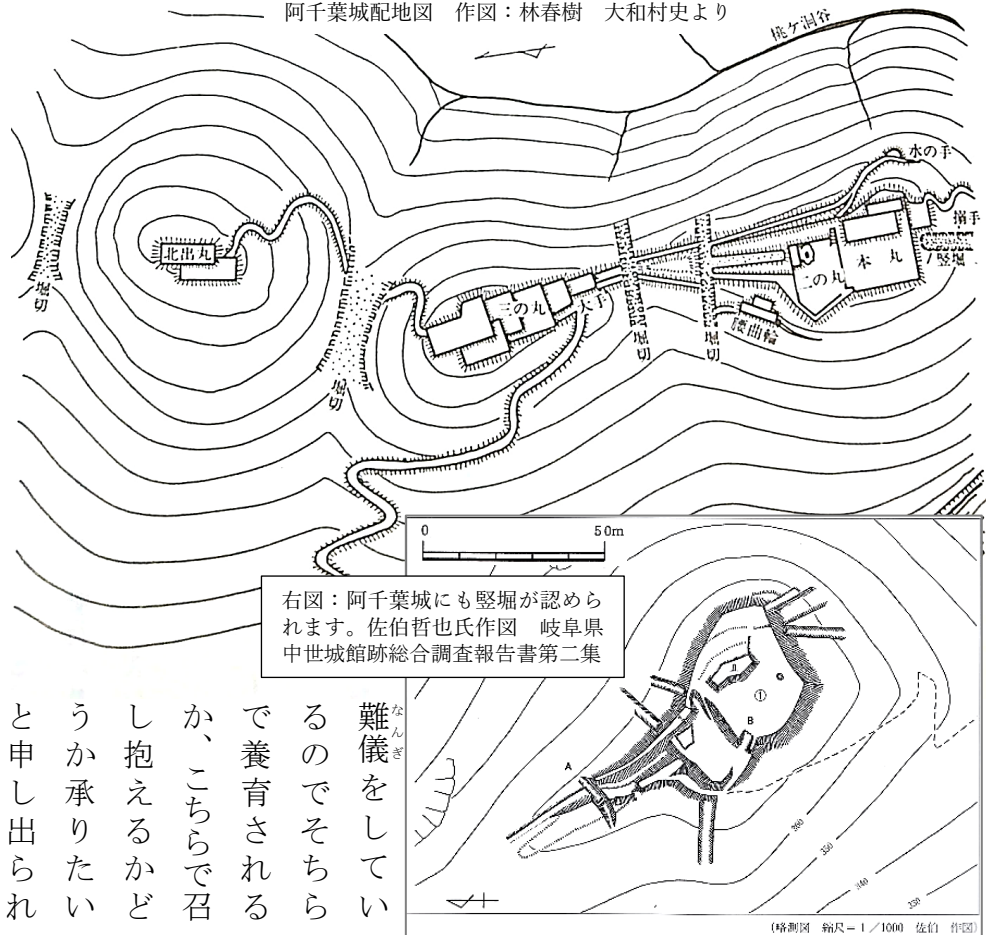
篠脇の城では早くも出陣を準備し、一番手に餌取肥後、二番手に日置主計助、三番手に松井縫殿助雑兵をたずさえ、剣の宮に陣を構えて八つの陣に備え立てた。城方には鷲見蔵人、川尻備中、森左膳、大将の鷲見貞保、上段、下段と陣を構えて、今か今かと待っていた。

篠脇勢は正面から押し寄せたけれども、城方の者、鉄砲が霰の様で近づけないので、夕方になるのを待って、池戸内記、遠藤唯右衛門、三木三十郎、各務、土屋等城の裏手より攻め寄せた。城兵等は死にもぐるいで防戦し、森左膳は突進して主計と戦い、共に討ち死にし、川尻備中もまた、餌取肥後と戦って討死した。こうしている間に、からめ手の軍は城壁に迫って来たので、貞保は幼子の千代丸を老臣の餌取広綱に託して遁れさせ、遂に自害し、鷲見蔵人が介錯して共に自殺した。からめ手から乗り込んだ篠脇勢は城に火をつけたので城兵の大半は討たれ、逃げてしまった。

その後、餌取広綱は千代丸と共に美濃国西牧谷へ落ち延び、千代丸が成長して後、信長公へ願い出、その時の八幡城主遠藤盛数へ使いを出し、鷲見が



阿千葉城配地図 作図：林春樹 大和村史より



たので盛数公は早速承認されて、鷺見千代丸(後の兵助、鷺見正保)と家臣餌取広綱に大島村を与えられた。(白鳥町大島の鷺見氏の祖となる)』

(注…盛数が仕えたのは斎藤龍興で、信長からの命というのは矛盾があります。また鉄砲は、天文一二年(一五四三)に種子島

難儀なんぎをしてい
るのでそちら
で養育される
か、こちらで召
し抱えるかど
うか承りたい
と申し出られ

に伝わりました)

この「濃北一覽」の「阿千葉城の戦い」からいろいろな疑問が浮かびます。順番に考えてみましょう。

① この記事はそもそも正しいのでしょうか？

「郡上古日記」の東常慶の所に次のように書いてあります。

『天文の頃、阿千葉鷺見一族御下知おごに背き、討手うってとして日置主計かすえの助、餌取肥後に仰せつけ、鷺見家来森なにがしという者、主計助を組討ちつかまつり、然れども肥後を始め味方の侍粉骨を尽くして早速攻め崩し、鷺見一家降参つかまつ仕り、御旗下に罷り成り。』

どうやら東常慶は阿千葉城を攻撃したことは間違いないようです。

ここで疑問が出てきます。鷺見城の鷺見保兼やすかねはなぜ同族の鷺見貞保の加勢をしなかったのかということです。鷺見氏と東氏の全面対決だったら加勢をするはずですが、その後東常慶と鷺見保兼が白川郷の照蓮寺しょうれんじや内ヶ島氏を仲介にして、水と魚のよきに仲良くするという起請文きしょうもんを天文一〇年一二月に出しているのです。東氏は戦国大名として生き残りをかけ、鷺見氏も氏族の生き残りをかけてそれぞれ必死だったのでしょうか。

さてもう一つ疑問があります。それは、鷲見氏はなぜ阿千葉城に來たのかという問題です。そこで昔からの言い伝えを調べてみます。

さてもう一つ疑問があります。それは、**鷺見氏はなぜ阿千葉**

城に来たのかという問題です。そこで昔からの言い伝えを調べ

てみます。



中津屋地区小字名

中津屋小字地図
「大中のかたりべ」
より



阿千葉城の位置 国土地理院地図より

「大中のかたりべ」に次のように書いてあります。

中津屋に「加賀太郎」という小字の地名があります。

これは驚見加賀丸（忠保の長男太郎干保）のことで、彼の屋敷があつたといふのです。あくまで言い伝えですが、地名に残つ

ていて、加賀丸が晩年出家してその屋敷から櫻野（いんぎの）を通って阿千葉城に通ったという話があるのです。大和町剣（つるぎ）ではなく白鳥町中津屋から阿千葉城へ通っていたというのです。

③ 郡上目城とはどこの城？

「長善寺文書」の三頁に次のことばが載っています。

郡上郡目城居住之仁者
東下総権守
玉井三郎
鷺見藤三郎

「ここに出てくる「目城」はこの城でしょうか？

A、目城は阿千葉城（森弘美文書）または千葉目城、剣目城

B、目城は鷺見城（鷺見度保文書）霞の城

いずれも「郡上郡鷺見郷御領地嗣家譜」より

の二つが考えられます。しかし、最初に東氏が入っていることを考慮すると、A、すなわち阿千葉城に自然と落ち着きます。

藤三郎は鷺見忠保（ただやす）ですから、もう彼の時代に阿千葉城に入っていたと思われます。加賀丸（かがまる）（干保・禅峯）はその息子ですから加賀丸が加賀太郎に隠棲（いんせい）したことは十分考えられます。

④ 鷺見氏は東家に早い段階から人質を出している

伝衛門家の系図（「鷺見氏・鷺見郷一覽」参照）を見ると、東家への人質となっているのが加賀丸の息子（弥兵衛（やひょうえ））と氏保（うじやす）の息子（餌取八右衛門（えとり））がいるし、弥平治は稲葉家の人質になっています。当時人質に出すことは服属（ふくぞく）したということでした。

⑤ なぜ天文一〇年なのか？

越前衆が天文九年に攻めてきたという記録が長瀧寺文書の中にあります。東氏と郡内の侍達はこれを撃退したのですが、鷺見郷は地理上、飛騨からの内ヶ島氏や前谷からの石徹白氏、さらに油坂峠からの朝倉勢などの影響を受けざるをえませんでした。そして、生き残るためにそれらの情報を集めていたことでしょう。（斎藤道三からの手紙など）鷺見貞保はこの時に、朝倉と何らかの関係があったことも考えられます。

さらに、鷺見氏は一貫して美濃国守護である土岐氏に従ってきました。ところが土岐氏と東氏の関係が悪化します（斎藤妙椿の篠脇城占領など）。これらのことから東氏から攻められたのでしょう。

この時点で、鷺見城には保兼（やすかね）、阿千葉城には貞保（さだやす）、北野城には直保（なおやす）が居ました。（それぞれの系統については第六章を見てください）

『鷺見城は、明応三年（一四九四）六月三十日行保が亡くなって

後、三男大学助保兼が城にいたが、保兼に跡継ぎの子がなく、美作守保重の子、保光が入って城を守った。

天正七年（一五七九）保光が亡くなり、その子孫の多くは岐阜に出て、斉藤及び織田氏に仕えたので、鷺見城は保照の孫、鷺見兵庫保直が入って居城していた。鷺見兵庫は、遠藤盛数に従い、その子孫も又、遠藤氏に仕えた者が多かった。』

鷺見家史蹟より

このことは次の資料からも確かめられます。

『盛数公旗下の侍・・・』

牛道穴間…猪俣五平次、

鷺見の郷…鷺見兵庫（保直）、

大島村…鷺見兵助（正保）、・・・

胤俊公旗下の侍・・・

大間見郷…鷺見弥平次、・・・』 「郡上古日記」より

鷺見氏は阿千葉城で滅んだわけではなく、鷺見郷や大島、大間見、北野、高富に残っていたのです。

そして、戦国時代には日本各地に散らばります。鳥取、兵庫、岡山、長野、滋賀、千葉、・・・と各地で、それぞれの来歴を背負いながら活躍をしているのです。

「中津屋の鷺見氏の五輪塔の墓」

阿千葉城の戦いで亡くなった人の墓だと言われています。中津屋の鷺見太郎左衛門家の方たちが代々守ってこられました。

